

前回までの職業能力開発分科会における
計画内容に係る主なご指摘事項

【第 96 回分科会（2 月 17 日）】

- 関連目標について、離職者訓練の就職率について、現状の数字より低い目標数値となっており、今後、東京オリパラや政府として GDP600 兆円を目指すなかで、もう少し高い目標とすることはできないか。
- 離職者訓練の就職率について、過去の実績等（過去 10 年間）を分析したうえで、たてるべきであり、その上で、離職者向けの委託訓練の目標について各年度 70%という目標については、若干疑問である。
- 労働市場インフラの戦略的展開の部分で、企業側からの視点は十分にかかっているが、個人のキャリア形成の視点が少したりないので、そのあたりについて、うまくバランスをとって記述すべきではないか。
- 関連目標について、各年度達成すべき目標と、32 年度までに達成すべき目標が混在していてわかりにくくなっているので整理すべきではないか。
- 中高年の職業能力開発の部分で、「中高年は離職したら再就職が難しいので、在職中の能力開発や転職に向けた支援が重要」との視点が伝わるように、もう少し記述を工夫すべきではないか。
- 就職氷河期への支援は、能力開発だけでなく安定行政を含めパッケージでやっていくというメッセージをだせないか。
- 非正規雇用労働者に対する求職者支援制度等を活用した職業能力開発という記述について、求職者支援制度は離職者向けであり

今の記述だとわかりにくいのではないか。

- ジョブ・カードも能力評価のツールであり、「能力評価」と「ジョブ・カード」をわけているのはなぜか。
- 「企業における自発的な人材育成投資の促進」とあるが、そもそも企業は「自発的」に投資を行うのであり、「自発的」というワードは不要ではないか。
- 計画のねらいについて、やはり今回のねらいはわかりにくい印象。元々本計画については、こういうねらいであり、第9次までの計画から何を継承して、今回の10次の計画ではこういうねらいであるというような記述があるべきではないか。
- 生産性向上について具体的な内容に触れるべきではないか。

【第95回分科会（1月27日）】

- 専門実践訓練の当初の考え方に立ち返って、非正規雇用労働者が在職しながらキャリアアップが図れるようなプログラムの開発をするべきではないか。
- 第4部の2の(3)の記述が、転職を促しているように見える。国の政策として進めるべきは、職場に在職し続けながら職業能力を再開発するという観点であって、転職の勧めではないのではないか。キャリアチェンジや早期再就職といった記述には違和感がある。
- 労働市場インフラの整備でどのようにして、何を実現しようとしているのか。どのインフラの部分を強化するために、各施策があるのか、その全体観を説明するべきではないか。

- 中高年齢者については、今までの職業経験に少し新たな技能を付け足すことによって職業機会を広げていく支援が大事ではないか。
- 国としてどういうメッセージを打ち出していくのかがやや弱い印象。全体像が見えるような記述にしてほしい。
- 対応する施策が、ちりばめられているのは理解するが、就職氷河期世代で、40代にさしかかっているフリーターについて、どのように対応するかがわかる記述ができないか。
- 非正規雇用労働者については、目指すべきキャリアがわからないという調査結果もあることから、非正規雇用労働者のキャリア形成支援のための施策について記述できないか。
- キャリア教育は小学校の頃から始めることが重要である。
- グローバル人材について、国は助成金で支援するだけと読めてしまうため、能開行政として、グローバルに戦っている我が国の企業に資するように、グローバル人材育成を国として行っていくというような観点がだせないか。

【第94回分科会（11月26日）】

- ITやIoTなど、成長が期待できる分野の訓練、を実施していくことは当然だが、全体のバランスも考慮してものづくりを始めとする雇用吸収力の高い分野の職業能力開発を引き続き重視・強化していくという記述も必要ではないか
- 技能離れについて国家プロジェクトとして、小中学生に対して、ものづくりへの対する憧れを抱かせるような施策を省庁の枠を超えてしっかりやっていくべきではないか。

- 学生が社会に出る前に働くことに関する制度・仕組みを、もっと知っておくことが大事であり、より明確に厚生労働行政と文部科学行政が連携を緊密にしていくことを謳うべきではないか。
- 学校を中退した者や、学卒未就職者など、学校と就労の狭間にいる方たちには、行政の手が差し伸べられない状況にあり、こうした方の存在を視野に入れた施策が必要ではないか。
- 地域ニーズに応じた職業訓練の推進を図るためには、行政、民間の連携をさらに強める必要があるため、例えば、認定職業訓練校の関係者を中央訓練協議会や地域訓練協議会に参画させる等の取組が必要ではないか。
- 技能士についてより社会の認知度や評価を高められるような取組として、具体的に、どのような人たちが受験し、増加しているか等の情報を整理分析した上で周知・宣伝に努めるべきではないか。
- セルフ・キャリアドックについて、雇用者側にとってもキャリア形成の重要性を確認する場として位置付けても良いのではないか。
- 若者の職業能力開発の記載のなかに、学校段階で多様な職業について理解を深められるよう、職場体験、インターンシップへの支援という文言を入れるべきではないか。
- 職業能力開発の目的について、就業の実現が主な目標に設定されていると思うが、職業能力を高めることによって、結果として所得が上がるとか、処遇が改善されるとか、より高い職に就けるということがあり、こういった考え方も盛り込むべきではないか。
- IT を活用した職業能力開発の高度化については、労働市場イン

フラのところに記載すべきではないか。

- セルフ・キャリアドックについて、まずは共通認識を持つことが必要ではないか。
- グローバル人材の育成については、国際協力の文脈ではなく、日本人のグローバル人材化に資する訓練という文脈で指摘したものであり、適切な内容を必要な箇所に記載すべきではないか。
- セルフ・キャリアドックについて、あえて造語を使わず、日本語名を考えるべきではないか。

【第93回分科会（10月22日）】

- 今回の計画の目玉として、東京オリンピック・パラリンピックがある中、グローバルという視点と、IoTにより仕事が変わる、社会が変わるといった視点も必要ではないか。
- ITが職業訓練や人材育成に貢献できる可能性は非常に高い。ITを活用することによって、公共職業訓練こそ、生産性革命の可能性が大いにあるのではないかと。また、eラーニングを通じて能力開発をすることで、新規求職者に対する公共職業訓練のカバレッジが広がるのではないかと。
- 企業が在職中の従業員の能力開発に力を入れるよう後押しし、誘導するような（助成金とは別の視点からの）施策が必要ではないかと。また、正社員だけでなく、企業内に在籍する非正規の方にも教育訓練投資がなされるような施策の検討も必要ではないかと。
- 若者の、ものづくり離れを防ぐため、技能五輪への支援の強化など、ものづくりに取り組む若い人たちがしっかりと訓練を受けて、やりがいを持って働けるような仕組みづくりが必要ではないかと。

- 技能に関する国際連携は重要であり、例えば意欲と能力のある中小企業が、他国に技術協力できるような支援に取り組むべきではないか。
- 小規模事業所がもっと助成金等を活用しやすくなるような支援を考えるべきではないか。また、関係機関との連携に係る成功事例を集めて紹介するべきではないか。
- 今後、5年先の日本ということで考えていくと、ITというよりはIoTやロボット革命という視点や、グローバル化と同時にグローバルという視点が必要ではないか。
- 総合的な訓練計画については、関する機関の情報共有に非常に大きなメリットがあるので、進めていくことが重要。企業内の人材育成について、長期的な展望の中で計画的に訓練ができるよう、知恵を出していくことが必要。また、今後の日本の生産労働力を高めていく上で、シルバータレントの活用も重要ではないか。
- 地域における産業のためにどういう訓練が必要かを的確に把握する上でも、より地域に近いところに職業能力開発の担当者を配置することを検討するべきではないか。

【第92回分科会（9月25日）】

- 人手不足は企業の成長の阻害要因。労働力需給の変化を踏まえ、在職者に対する企業内訓練の強化について検討すべき。
- 国としてやるべきことはセーフティネット。弱者に属する方々（非正規労働者、女性等）の能力開発、スキルアップの在り方について、国の役割をどう果たすかということが大事。
- 労働条件、雇用環境の改善などの施策も重要。安定行政とセッ

トで考えることが必要。

- 職業訓練やキャリア形成の支援を行う主体は様々いるが、幅広い関係者（国、地方自治体、企業、学校、労働者本人、民間団体等）の役割分担を明確化すべき。
- 雇用型訓練は、雇用への橋渡しの役割を果たしているところであり、より一層推進していくことが必要。
- 非正規雇用労働者に関して、制度の新設を含めた拡充を検討すべき。また、ハローワーク・若者サポートステーションなどに来ない層の潜在的なニーズを掘り起こすという視点が重要。
- 早期のキャリア形成の重要性からみて、教育政策との連携の下、学校教育における職場体験にキャリアコンサルタントの関わりが重要。また、キャリアコンサルタントの専門性についても整理が必要。
- 中高年が働き続けるため、あるいは次の仕事を見つけられるようにするためにも、中高年に対する職業訓練の視点が重要。
- 「労働市場インフラの整備」について、個々の施策が全体として絡んでどのように機能していくのかについての議論が重要。その中で、ITの活用によって、幅広い層に効率よく職業能力開発サービスを提供することなど、ITを使った生産性向上を考えることが必要。